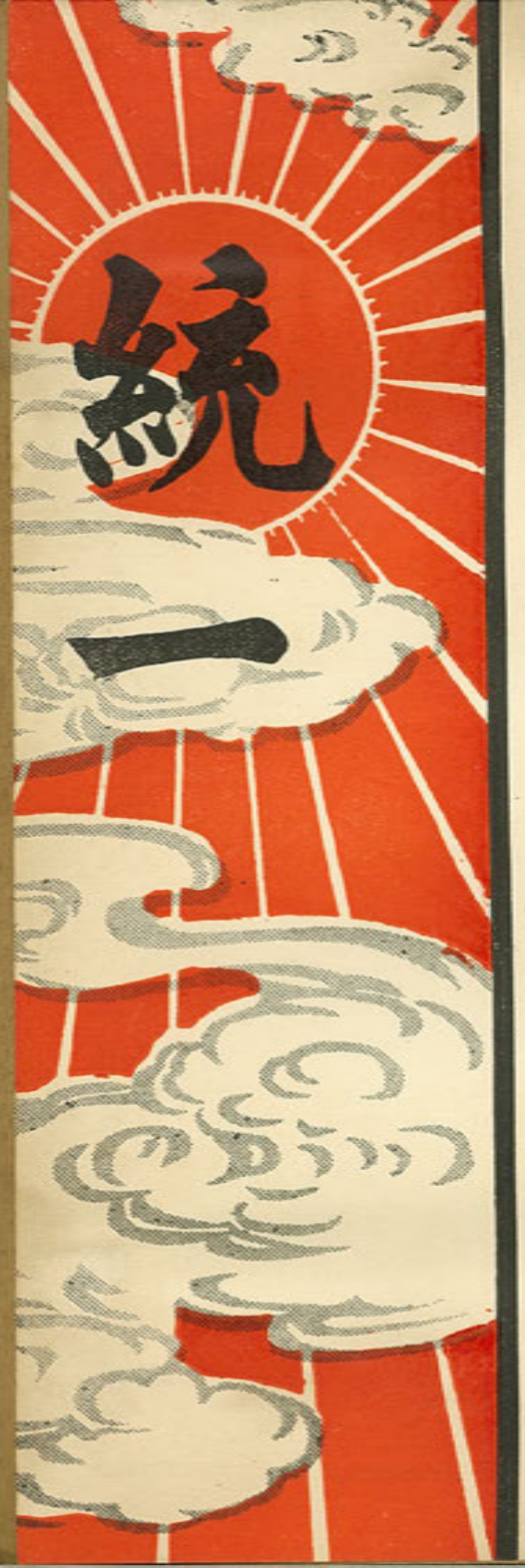

目次

修養と信念(中)……聖應院日生上人

開目鈔の地位に就て……無名氏に答ふ……磯部滿事

恩師の遺業に關して……普く護法の士に檄す

記事

○統一團を財團組織となすに就て

○各地教報

○誌料領收

第三十六年九月號

絶好の機會！

大僧正故本多稔下最近の名著四種左の通り特價提供す吉凶共に此等の贈答は自他の法益極めて甚大ならん部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

一 法華經要義　定價 金參圓　送料 十四錢

一 日蓮主義心髓　定價 金壹圓八拾錢　送料 十錢

一 日蓮主義精要　定價 金參圓五拾錢　送料 十六錢

一 日蓮主義本領　定價 金貳圓五拾錢　送料 十二錢

今月中に限り一部賣は二割引
十部以上十九部迄二割五分引
二十部以上四十九部迄三割引
五十部以上九十九部迄三割五分引
百部以上は特に破格割引　送料は實費を申受く

申込所　東京市外南品川町妙國寺內「教」發行所　振替東京一〇九五〇番

統一定價		
一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共 前金之事
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料		
表紙一頁	金貳拾五圓	前金之事
一頁	金九圓	
半頁	金五圓	
四分一頁	金三圓	

昭和六年七月廿四日印刷納本
昭和六年八月一日發行（第四百三十七號）

編輯兼發行人　磯部滿事　神奈川縣横濱市磯子區磯子町廣地一四八
印刷人　鈴木日雄
印刷所　都印刷所　東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地　電話高輪六〇二四番
發行所　統一發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　振替東京五一〇七一番

不許複製

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

修養と信念（中）

聖應院日生上人

本講に於いては宗教の側を語るよりは、修養の側に於いて信念の必要であることを明かにして置きたい。それは今申す通りに第一には修養の根柢が信念に基くといふこと、第二には修養の活力が信念に依つて維持せられるといふこと、第三には修養の完成が信念と同じ有様であるといふことに於いて、修養の始めも、中途も、出來上りも、始中終すべて信念と離し得ないといふ點を明瞭に論じて置きたい。

最初に修養の根本が信念に基くといふことは、以上にも申したのであるが、更にこれを纏めて說明して見ると、吾々人間の人格を作る根本は、即ち誠心を開くといふことなのである。他の言葉を以て言へば、人間の靈性といふ心の中の微妙な光、微妙な能力を發現して行かなければならぬ。外部から附燒刄で斯うするのだ、あゝするのだといふことを考へただけではいけない、心から醒めて、善を行ふ光を心の中から發射するやうになることが人格を作るといふことになるのである。その基本人格といふものが開かれると、自然に屬性人格といふものが善くなる、勇敢の下に弱卒なしといふが如くに、誠心の開かれた人間には、智慧の側も、慈愛の側も、勇氣の側も自ら發達して來て、立派な整頓した人格が出來るのである。

この基本人格としての誠、それはどうしたら開かれて來るかといふことが一番大きな問題である、殆ど問題はこの一つである、人間の心の靈光を開くことが出來さへすれば世の中は救はれるのである。人の心が曇り、人の心が濁り、人の心の光が消え去るといふことが、一切の惨きの本なのである。然るにその心の光。誠を開く方法といふものを論議しないのが現代日本文化の病弊、廣く言へば世界の二十世紀の文明の墮落といふものである。心を放任して置いて、ただ彼奴がどうだとか、此奴がどうだとか言つて、汝の心如何といふ問題に歸り得ない。古來の聖賢は聲を齊しくして、先づ己の心に歸り、己の心の光を發せよと言つて居る。日本でも有名な佐藤一齋先生といふ人がある、四書五經にも一齋點といつて、この人の訓點が廣く行はれた位であるが、その一齋先生が『世の中の暗きを憂ふることなかれ、己が心の一燈を頼め』といふことを言はれて居る。懐中電燈さへ持つて居れば、道が暗かつたならばその電燈を懐から出して照しさへすればよい、だから道が暗いといふことよりも、懐中電燈を忘れて來たといふことを後悔しなければならない。唯だ暗い〳〵といふたならば、夜になれば何時でも暗いのだから、自分の心に光を持つて居るやうな人間として暮さなければいかぬ。他の暗いのは歎くことはない、持つて居る提灯の消えることが歎かはしいのではないかといふことを言つて居るが、これが非常な大きな問題なのである。

そんなことを言つても駄目だといふのが二十世紀の議論である、今日の議論は、そんなことを言つて

も食へなければ心の光も何もあつたものではない、そんなことは後の問題だ、衣食足つて禮節を知るで、人間食へないとなつたら心の光も何もあつたものではないと言つて、いきなりパンに噛り付くやうなことをやつて世の中を騒ぎ散らかして居る。ちよつと聞くとその方が尤もに聞える。「腹が空つては何も考へることは出來ませぬ」と言ふと尤ものやうに聞えるが、それが大きな間違である。さう言つて居るとだん〳〵食へなくなるのぢや、腹が空つて食へない〳〵と言うて、皆が不貞腐るといふとどうでも勝手にしろといふことになる。ちやうど夫婦喧嘩をして、女房は怒つて飯を炊かない、亭主は墓口から錢を出さないといふことになるから、何時になつても飯が食へないといふことになる。やはり秩序を戻して穏かにやつて行かないと世の中は都合よく行くものではない。此頃も選擧などと言つてガタ〳〵やつて、新聞が進歩ぢや、善い事ぢやと言つて居るけれども、これはやり損ひである、吾輩は斷言して置く、普通選擧だなんと言つて大勢寄つてガタ〳〵やつても、結局は十人位の無產黨に日本の文明が咥へて振られるやうなダラシのない態になる。これは決して野蠻な言分でも何でもない、兩方が權力を爭へば、その間に入つて少數の奴が色々の事をするやうになる。それが爲に日本の政治は咥へて振られる、鷸蚌相爭うて漁夫の利となるといふことは馬鹿のことを言ふのである。それが何で文明の進歩であるか。併ながらさういふ暗愚なことを今日はやるのである。己の心に歸れといふことを忘れて、さういふ形式的なことに依つて人類の文化が完成されるなど思つて居る、何たる愚なことであるか。

古今の哲人は皆これを嘲けることである、今少しの時間を經過したならば、必ずやこの過ちなる事がよく判るやうになる。それは西洋の或る新聞に、日本の普通選擧を批評して、伊太利のファシスト運動、即ち民衆々々と言つた愚論を打破つて、一つの變つた政治をやる道程に向つた、今度の選擧は伊太利のファシスト運動の道程と同じものだといふことを書いて居るが、あれが唯だ一つ意義があるかと思ふ、あとは嘘つぱちである。必ずやこれでやつて行つたならば、ファシスト運動のやうにワーッと言つて打壊さなければならぬ事が來る。兩方が下らぬ利權の爲に喧嘩をして居る、大多數の者が似たり寄つたりの勢力で喧嘩をして居るからして、三人か四人の者がどつちへ附くかといふことで勝敗がきまるから、多數政治であるべき議會政治といふものが、最後の一人の一番猾い、一番馬鹿な人間に依つて決定するといふことになる。だん〳〵やつて行つて見たらわかる、一人足らぬ、二人足らぬといふので、あつちへ引張りこつちへ引張り、一番猾い者が最後に殘つて、それに依つて決する。それは決して日本の國民を代表するものではない、日本の一番馬鹿な、一番猾い者に依つて日本は支配されるといふことになる。それが一人でなくとも、三人でも五人でもやはりさういふ傾であるから、一人の時も十人の時も餘計違ひはない。そんな駈引で動いて居るやうな政治、そんな不合理な文明が決して良い文明ではない、これは因つたと思つて覺めたならば、政友會も民政黨も、そんな愚な黨爭を抛つて、もう一つ政綱を立て直して、それから考へなければならぬ。さういふ己の主張と非常な距離のある者の力を藉りて己の利權慾を達せんとするが如きは、實に愚劣な政治である。併しそれは心の光といふことを忘れた文明の落ち行く悲哀の實狀である。

どうしても人の心の誠を本にして進んで行かん限りには、人生といふものは作り上げられるものではない。今のやうに權力に基くとか、金力若くは腕力、さういふものに基いて世の中を支配するといふことは間違つた形である。人は善良なる觀念、所謂道に基かなければならない。犬養木堂氏も言うて居る、今度の選擧の結果から見れば、だん〳〵政治は空漠な抽象的の議論を去つて具體的になる……斯う言ふとエライ立派な言葉であるけれども、具體的になるといふことは、だん〳〵低いことになつてバンの問題、給金の問題といふことばかりになつて、理想の問題とか精神の問題といふやうなものは、モウ議會壇上に於いても跡方もなくなつてしまふといふことを犬養氏が言つて居る。それを進歩といふ人があるかも知らぬが、私は犬養氏の言ふ通り、あゝやつて行き居つたならば、氣の利いた問題は何も出て來ない。「贊成するその代りにどうして呉れる」「それがきまらぬ中は右とも左とも言はぬ」といふ譯で、その勝敗の決する所は實に愚劣な、人の前で話されないやうなことに依つて國家の政治は左右されて行くのである。要するに現なまである、何も理窟はない、それが取れない以上は話に乘らないといふことになつてしまふ、實に淺ましい事である。さういふ多數の力とか、金錢の力とか、權力といふものに依つて道を忘れたものは、即ち文明の破壞である。然らばその道といふものを立てんとするなら

ば、道は何處から立つか、人の心の誠を開いて置かなければ道の道たる所以が判らない。それ故にその誠を作る本が大切である。

それはこの宇宙の絶對者に對して起る敬虔の觀念が、即ち人の心の誠となるのである、欺くことの出來ないものがあつて、始めて人の誠が開かれる。それを儒教の方では天道明德の教と申すのである、天道を敬ふ時、人の心の誠が開かれるといふのである。

我國古來の神ながらの道に於いては、敬神の觀念、何處までも皇祖皇宗の遺訓を尊び、その古を重んずる觀念のそこに人の心の誠が開かれる、古を重んずるといふことは、根本の神樣に戻つて、神を絶對の尊嚴者として考へるのである。ただ現在の皇室を考へただけでも本當の人間は出來ない、皇室の御祖先が神樣である、だから皇室は唯だの人間ではない、殆ど超人的の聖德を具へ給ふと考へる時に、宗教性の響きがあつて、始めて日本國民の道德性といふものが顯はれるのである。普通の憲法の解釋が如何にあつてもそれは道德ではない、天津日嗣の御爲、即ち天皇と申して居るのである、人皇ではない。天皇は足は地上に下つて御在でになるけれども、その頭は天に届いて居る方がやとしてあるから、あきつ神即ち生ける神樣として考へて居る。それは宗教の神樣といふ程ではないけれども、そこに宗教性を帶びて居る人格者である。いくら研究して見ても唯だ普通の道德や理窟では、この皇室の聖德といふものは判るものではない、宗教性を帶びさせ給ふ所にある。だからして神ながらの教の道義の根本は敬神の觀念に在るので、明治維新の當初に於いて敬神愛國の旨を體すべき事と言ひ居つたが、やはりそれが宜いのである。今はたゞ「忠君愛國」と言つて居るが、忠君愛國は實際の道德を言ひ現はしたもので、敬神愛國はその道義の生れて來る根本を教へたものである。佛教の方に於いては、佛を敬ふことに於いて心の光、即ち佛性が覺めると說かれたのであります。

明治天皇の御製にも、

眼に見えぬ　神に向ひて　はぢざるは
人の心の　誠なりけり

眼に見えぬ　神の心に　通ふこそ
人の心の　誠なりけれ

くもりなき　人の心を　千早ふる
神はさやかに　照し見るらむ

斯ういふ意味の御製は澤山ありますが、全く人間の誠といふものは、宗教的の敬虔の觀念、眼に見えぬ神、千早ふる神、その神に向ふ心のそこに人の誠が開かれるといふことをお示しになつたことは、非常に明瞭なことである。これは宗教の話をなさつて居る譯ではない、道德の根柢が、人の心の誠は神に向つて發現するといふことを示されて居る。

楠正成が櫻井の驛に於いて子の正行に與へた卷物がある、彼の子別れの一幕は實に感激の多きことでありますが、正成は戰に強いばかりではない、非常な學者であります、實に正成は智德武勇、併せ備へ得たる人であつて、その正行に與へた卷物に書いてある所を見ると實に立派なものである。そこには道德上の事としては、「山岳よりも重きものは義、鴻毛よりも輕きものは死」といふことが書いてある。これが先つ國民道德の生粹な所で、命は鳥の毛ほど輕きものである、義は山岳よりも重きものであるといふ、この一死を輕んじて義の爲に盡すといふ徹底した觀念が國民道德であるが、これを書く場合にその始めの所に、『天道歷然たり』といふことを書いて居られる、そこが大切な所である。歷然といふことは歷々と申して、ハッキリして居ることである、山高く谷低しといふやうにハッキリして、眼が明いて居る限りは誰れでも見えるといふことである、天道歷然たり、孔子が『天豈ものいはざらんや』と怒鳴つたのと同じことである。それはやはり宇宙法の天道歷然として、その絕對の權威と慈愛に對して、服從し感謝するその精神、それが人の心の誠を喚起して、さうして天皇に對する服從と感謝との精神となり、それが義の德に現はれて來るのである。義は山岳よりも重しと云ふ道德精神は、天道を敬ふて感謝する精神より流れ來つたものであるからして、正成は『天道歷然たり……山岳より重きものは義』と書かれたのである。その天道歷然たりを除つてしまつては、山岳よりも重きものは義といふても、それはたゞ理窟になつて來て、マゴ〳〵する譯なのである。

今日の學校教育では所謂講釋道德とでもいふべきものであつて、說明ばかりして居つて、この天に對する敬虔の觀念のやうなものは少しも養はないから、君に對して何故に忠義を盡すべきかといふやうな問題でも出されるとマゴ〳〵して居る。さういふやうな事では幾らやつても本當の人格は作ることは出來ないのである。どこまでも今申す心の誠を啓いて、それからさういふ道德が現はれて來るのである。故に明治天皇が軍人に賜はりし勅諭には『心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき』といふことをお示しになつて居る、心が誠でなかつたならば、どんな善い事を言ふても、しても、それはうはべの裝飾、僞りであつて何の役にも立つべきものではない、『心だに誠あれば何事もなるものぞかし』一誠これを貫けば出來ない仕事はないぞと仰せられたのである。その心の誠といふものは、今申す宗教的態度に依つて天道を敬ふ所から開かれて來るものである。

斯ういふことを明かに了解したならば、修養の根本は宗教的の信念に基くもので、修養と信念とは微妙な連結があり、寧ろ同根一躰のものであつて、たゞ枝に於いて分岐して居るものだと考ふべきものである。

『大學』といふ書物に、人の止まる所は敬といふことがある。鳥は木の枝に止まるが、人は何處に止まるのであるか、若しも鶯が掃溜に降りて蚓蚯を食つて居つたならばおかしなものぢや、梅の枝に止つてホーホケキョと鳴いて居る、そこに妙味があるのである。『緡蠻たる黃鳥は丘隅に止まる、その止

まる所を知る、人にして鳥に如かざるべけんや』人間は何處に精神を据附けるか、それが判らなければ鳥にも劣るものではないか。『止まる所を知つて而して后に定まる、定つて而して后に靜かなり、靜かにして而して后に安し、安うして而して后に慮る』といふことがある、其止まる所を知らなければ餘の考などは駄目なものであるといふことを敎へたのが、即ち修養の法則である。たゞ腹式呼吸のやうなことをやつて腹を膨らましたり、又謠曲でもうたつて居つたならば人の心が落着くといふやうなことは、鶯が掃溜に下りて蚯蚓を食つて居るやうなもので、人として止まる所を知らないものである。そんなことは心を靜める一つの方法で、それならば酒でも一杯飲んで寢たら一番心が靜まる、そんなことが人間修養の法則ではない、心の靜め方がある。それは今の敬ふといふ心を通して靜かにならなければならぬ、敬ふ心とは天道を敬ふ氣分である、宗敎的の情操を通してさうして精神の安定を得、而して後に靜かに慮るといふことになるのである。古來の聖賢はその通り敎へて居る、止まる所は敬である、大學に『止敬』とあるではないか。

支那に於いても朱子學派などはこの點がぼんやりして居つて、究理の學といつて、ちやうど今の科學知識のやうな屁理窟を並べたりなどしてマゴ〳〵したのであるが、それではいかぬといふので王陽明が朱子學を蹴つて、さうして役は主一無適といふことを唱へた。細かいことをコツ〳〵研究的の態度でやつた所で、それで人格が出來るものではないといふのである、朱子學の方は致知格物と申して、究理の學といふ科學のやうなことをやる。ちやうど日本では加藤弘之博士あたりがその方から來て、いろ〳〵細かい理窟を言うて居る、强姦何が故に罪ありや、子は何が故に孝行すべきかといふやうなことをツベコベ言うて、長い間日本の思想界を惑亂したのである。これを日本人は學者といつて居る、殊に敎育界の人は、加藤博士は國體の先覺者だといつて尊敬して居るけれども、どうも變な學者ではないか、徒らに小理窟を並べてこの穩かな日本人の思想を惑亂した罪は、決して赦すべきものではない。これはやはり今の究理の學といふやうな屁理窟を以て、倫理が單に說明で事が濟んだやうに思つて居るからあんなことに骨を折つたものである、それは大失敗である。その失敗がスーッと日本の敎育界に漲つて居る、加藤弘之博士のやうな頭腦の失敗が、殘る隅なく全國に今日は及んで居る譯である。

陽明學の方だとそんな所へは行かない、陽明學の方は、誠を磨くといふ一つに持つて行くのである。小理窟などを研究しても人間は駄目じや、この玲瓏たる人の心の光、誠心の泉源を打拔きさへしたならば後は樂に流れて行く。心の誠が覺めない人間に向つて『あゝせい、斯うせい』といつて理窟を敎へたからといふて、それでうまく行くものではない。恰もそれは貰ひ水をして來たやうなもので、こつちの茶椀には親孝行の水……、こつちのコップには友達に親切な水……、これは商賣に勉强する水……といふやうにコップに、少しづゝ水を貰つて來て置けば、それで事が足りるやうに思つて居るが、そんなものはひつくり返せば直ぐに無くなるし、放つて置いても水が蒸發してしまへばそれつきりのものじや

ないか。ちやうど現代の學校教育は說明倫理であるから、中學校でも女學校でも、出て來た生徒は初めの中は少して知つて居るけれども、それが倫理の講釋を書いたノートが何處かへ見えなくなつて、半年か一年も經てば、コップの水が蒸發してしまふやうに悉く無くなつてしまつて元の杢阿彌やや。それではいかぬ、陽明はその點をやかましく言つたものである、根本の泉は誠といふ一つである、それは天道を敬ふことに依つて開かれるから、單に「誠」といふ一字を使つてはいかぬ、それでは自力的になつて紛らはしくていかぬ、『敬』と結べ、「誠敬」離るべからずと論じたのが陽明學の骨子である。人の誠を語らんとするならば、天道を敬ふことを忘れてはならぬ、誠を語れば必ず敬ありといふので「誠敬」と熟字して、この二つは一つのものであると說いた。この誠敬一致するといふ意味を十分に分解して行くと、やはり修養と信念といふものが結合して居るものであるといふやうに、陽明の學說がなると思ふのである。

そこで私は陽明の斯ういふ思想は非常に面白いと思ふのである、この一つが成り立ちさへしたならば、何事でも次第によく判るやうになる。即ち修養の根本は信念に在るといふことを力說したのである。

佛敎は前に申す通りに道德的の敎で、自ら其の心を淨くすると說いたけれども、その淨くする方法は、やはり佛を信ずることに依つて淨くなるといふので、信が德の母であるといふこと、信が水を淸ます珠の如きものだといふこと、皆この信仰が道德性なものであるといふことを說いて居る。華嚴經の菩提心稱讚のことば――菩提心といふのは信念と言つても宜いのであるが――それは實に周到を極めたもので、今その一二を御紹介するならば、

譬へば天上の黑栴檀香は若し一銖を燒くもその香り普く小千世界に薰ず、菩提心の香りも亦復是の如し、一念の功德普く法界に薰ず。

斯ういふやうに說かれて居る、天にある黑栴檀香といふ黑い色をしたよい香りのものであるが、それは少しばかりを焚べても、その芳き香りが小千世界といふ廣い世界に薰る、人の心の中に菩提心即ち信念を起したならば、その一念の宗敎信念でも、其香りが普く法界といふ天地宇宙に擴まるものであるといふ。その一念の功德が普く法界に薰ずるといふのは、宗敎の信念、それが道德的の力を現はすことをいふのである。法界に薰するといふのは善德の香りである、信念の香りといふものが別にあるものではない、信念の香りは德の香りである、だから「一念の功德普く法界に薰ず」と言つて、德が薰ずるのである。又

譬へば一燈闇室に入らば百千年の闇を悉く破り盡すが如し、菩提の燈も亦復是の如し、煩惱の暗障悉く除盡す、

と書かれて居る。一つの燈が暗い室の內に點ぜられたならば、百年千年閉切つてあつた室でも一度に明るくなる、人の心が永らく閉ぢられた煩惱の闇であつても、菩提心の信念一たび覺めれば、直ぐに

その闇は除かれて明るくなると言つて居る。その暗闇の心が明るくなるといふのはどういふことであるか、その暗闇の心といふのは苦惱なり罪惡なりをいふのである、暗いといふことは一方は煩悶すること、一方は罪惡を意味して居る。その苦を去つて法悦の心となり、罪惡を去つて道德の心となることが、闇を除いて光を與へるといふことである。ただ苦しみだけを除いて樂しみを與へるといふことではない、暗は即ち煩惱の暗障と申して、罪惡の方面が寧ろ强いのである、一燈闇室に入れば闇を除くが如くに、宗教の信念は人間の德性を開發して來るものであるといふことになつて居る。

斯樣な意味に於いて考へると、誠に道德の根柢が信念に一致して居るといふことが明瞭になると思ふ。日蓮聖人の如きは『行學の二道は信心より起る』と明言せられた、行といふのは即ち菩薩行を實行することであるから、即ち道德行爲であるが、それは信念から起つて來る、信は行の本であつて、一切の善い事は信念が本で起るのである。

それ故に佛教の思想、は修養の根本が信念であると同時に、信念の働きは道德を生んで來ないやうなことでは役に立たない。ただ信心が信心で孤立して、この世の中のことはどうでもよい、死んでからその信心が役に立つて、お閻魔樣の所に行つた時に、それが積罪の力となつて「惡い奴だけれどもお寺に行つて信心したから、まあこの婆は赦してやれ」と云ふやうなことで、閻魔樣の法廷で初めてそれが効果を現はすやうな信心と思つたならば駄目ナンである。現在の生活の上に、現在の人格の上に信心の効能が現はれて、その人格を通じて人の幸福といふものがあるのである。その點に日本人の大きな誤解がある、人格を磨かずして幸福を握らんとするのは非常に間違つた話である、人格といふものが幸福の源なんである。恰も音樂の興味といふものを感じやうとするには、自分が音樂のことに就いてそれだけの修養をしなければならぬ。三味線ならば三味線に興味を感じ、バイオリンならバイオリンを聞いてその妙味が判るやうにといふには、その樂器に就いて、自分がそれを彈くことが出來ないまでも、その音樂の意味合、その感興といふものを修養しなければならない。修養することに依つて、人の彈いて居る三味線でもバイオリンでも、それだけの興味を感ずるのである。繪なら繪を見て、これがよい繪だと思つて感興を惹くには、繪に對するそれだけの知識、了解、修養がなければならぬ。さもなければ蕎麥屋の店に懸つて居る惠比壽樣が鯛を釣つて居る一枚十五錢位の繪も、立派な畫家の描いた五百圓千圓の價値のある繪も同じことで、寧ろ「こつちの惠比壽樣の方が大きいからこの方がよからう」といふことになる。

人間は修養を通して、微妙な高等な幸福といふものを贏ち得るのである。人間の幸福といふものが、たゝパンパンといつて食つたり飲んだりすることだけならば、成る程何も修養をしないでも、餘計パンを食つた奴が勝といふことになるけれども、さういふ低級な所には本當は大した幸福はない、そんな物だけしか幸福がないと思つて居る所に煩悶がある。パンのやうな物だけが人間の幸福ではない、食物は

刺身をやめて蒟蒻にしても、その精神の光に依つて多大の幸福がある、絹の着物をやめて木綿を着ても幸福があるといふことを了解した時に、始めて人間の幸福といふものが増大するのである。食ふ物や着る物だけが人間の幸福だと思つて、「サア着物が破れた、前には銘仙であつたけれど今度は木綿か、情けない」……といふやうな風に考へて居る所に、人間の煩悶苦痛がある。物質を以てのみ人間の幸福を計算せんとする文明は、人々をして悉く苦しみの中に陥れる所の殘酷なる文明といふものである。

その事は誰でもよく考へて御覽になればわかる事である。お釈迦様が政治の方面を去つて、精神の方面に領土を拓かれたのもそれが爲である。人を單に物質の世界のみに於いて眞の幸福を味はしむることは出來ない。と言つて物質を輕んずることもなければ捨てることもないが、物質は助成である、人間の幸福を助けるものである、それが本當の幸福の目的ではない。裸では居られないから着物を着て居るけれども、着物を着ることが人間の目的ではない、人間が人間としての仕事をする爲に食物を攝るのだけれども、蒟蒻を食ふのが目的ではない。人間は立派な精神を磨いて立派な働きをするが爲に、身體を包み或は食物を攝るので、食つたり着たり寢轉んだりすること位が人間の目的であつては、甚だ淺ましいことである。であるから上手に着て、上手に食つて、上手に寢て、あまりその方には心勞しないやうな方法を講じて、さうして精神に餘裕を作り、活動の餘裕を作つて行くのが氣の利いた人間といふものである。精神の方にも活動の方にも餘力なく、食つたり着たり寢轉んだりすることに齷齪して、喧嘩など

をして行くやうな人間は、最も淺ましい狀態と言はなければならぬ。

であるから私は着物などでも、なるべく安價な物に一定したら宜いと思ふ、非常に高價な絹の着物などは成るべく廢めた方が宜しい。皆が銘仙なら銘仙だけしか着ないといふことになつてしまへば、それで濟むのだけれども、一方がお召のやうなものを着て居ると、銘仙を着て居る者はやはり羽振りが利かないやうに思つて面白くなくなる。それで近頃はお召も安いお召ではいかぬやうになつて、段々ゴリ〳〵したやうな非常に上等なお召をみんなが着る、此頃は大阪や神戸に行つて見ると、實に立派なお召の羽織のやうなものを着て居る、さうすると今迄の二十五圓や三十圓のお召などはとても引立たない。それを女の人などはわざと見せびらかすやうにして往來を歩くから、段々みんながその眞似をして行くのであつて、さういふことはやはり一つの罪惡であらうと思ふ。英國あたりの經濟學者は、人間の慾望といふものを抑へてしまつたならば、產業は發達しないといふやうなことを言つて居るけれども、それは成る程慾心で働く所もあらうけれども、それでは本當の文明は開かれないと思ふ。やはり教育勅語にあるが如くに、公益を廣め世務を開くといふことを目的として、殖產興業も道德觀念に刺激されて活躍するやうな人間を作らなければいかぬと思ふ。（次續）

開目抄の位地に就て

無名氏に答ふ

磯部滿事

去二月二十八日神田局の消印で左の無記名御質問狀が參りました。（今後御通信には可成御記名を願ひます、御差支なれば匿名表は差控へます）

合掌　本多日生上人は日頃の御講演及びその著書中に開目鈔は日蓮聖人御書中第一なる事は予の生命にかけて主張する所であると仰せられて居ります、然るに今回國柱會にて發行せられました「毒鼓」には同會の山川智應先生が堂々と之に反對し本多上人の義を否定せられて居ります。吾等本多上人を敬仰する者如何に之を見る可きや、願くは上人親しく起つて之を講明し給はむ事を、吾等初心敬仰者の爲に將又未來永遠の衆生の爲に、合掌

右に關して早速お答へ致す筈でございましたが御承知の通り本多日生上人の御急變に伴ひ記事輻輳等の爲め延引に延引を重ね漸く今日不肖ながら左の通りお答を致します。それには先づ山川氏の開目抄要講中の本件に必要なりと思ふ部分を拔萃致します。

氏曰く

（其一）　本文講述に入る前に『講前の用意』として、數件の語るべきものゝある中、最重要なるものは、『本鈔の全御書における位地如何』といふことであらう。

古來本抄は「觀心本尊鈔」と共に日蓮聖人の二大主著とし、または「安國論」と共に三大主著とせられ、更に「撰時抄」「報恩抄」と共に五大主著ともいはれてゐる。乃至三大主著とは三大主著の中に――三大主著の生起も環の端なきが如くに三鈔の關聯のしばらくも廢すべからざる斯の如くである。

（其二）　德川中期の顯本法華宗品川本光寺の合掌阿闍梨日受師はこの著「如實事觀錄」の序の中に

『無始事常住ノ事ノ一念、事ノ三千ヲ判ズルコトハ正シク開目抄ニ在リ、故ニ之ヲ模範ト爲シ以テ十法界抄、將タ本尊抄ヲ拜シ、又此ノ三抄ヲ以テ之ヲ諸御書ノ本意ト定ムベシ、而モ諸餘ノ祖判ノ如キハ或ハ用ヒ、或ハ用ヒズ』

といひ本抄を以て聖人宗義の精髓を說ける模範御書としてゐる。また現代の本多日生師もその「開目抄詳解」には「日蓮聖人第一の遺書」と冠し、且つその序文に

開目抄は日蓮教學の最高標準にして諸種の要義を開示するのみならず字々大士の心血を披瀝せるが故に警句金言紙上に躍動す古今之に親炙せる者は覺えず感奮興起せざるはなし……不肖固より謗劣豈善く開目抄の眞意に體達すと謂はん唯幸に師資の法統を繼いで聊か啓悟する所あり萬一の光耀に資せんと欲し齊戒沐浴して全幅の誠を披陳するのみ　日生若し本化教觀に寸功ありとせば恐らくは此の詳解ならんか若し幸に予をして法門不滅たらしむるありとせば其れ或は此の詳解ならんか

といはれてゐる、謹嚴莊重　師の自信と抱負とがその謙抑の文中に溢れて後進吾等をして景仰措かざらしむるものがある、だがその開目抄を最高標準とする日受師の意見を繼承せられた斷案には服する事は出來ないのである乃至日受師及び師の開目抄第一書との此の斷定は少くとも日蓮聖人その人の御自認とは相違する。

（其三）　開目抄が「一期ノ大事」であると共に本尊抄も「當身ノ大事」であるのみならず本尊抄の心は「二千二百二十餘年ノ間未曾有」とせられてゐる、日受師及び本多師が開目鈔を以て獨り聖人の第一書とせらるゝのは此の聖人みづからの御念釋にも背くもので吾等は斷じて同意することは出來ぬのである。

（其四）　吾等の所見如何といへば

開目抄は日蓮聖人の教門における第一書であり觀心本尊抄は日蓮聖人の觀門における第一書である、教觀表裏して互にその所顯に於て第一書なのである、但し落居が觀心にあるのは五段相對の最後が本門觀心に收まるのでも明かであるから落居においては本尊抄が到頭の第一書となる

（其五）　師の如き開目鈔一點張りの安心は眞宗の阿彌陀佛や基督教の神の名を本佛釋尊と取り換へたに過ぎぬが如き結果をも招き出す弊があらう、蓋し師の立場よりせば同じく弊を招くものとすれば

汎神教的多神教的の弊よりも一神教的の弊の方が宗教として高等の程度にありとせらるゝでもあらう、だがこれ兩抄を岐して二つにするところから生じた兩弊である、教觀一如して表裏互顯せば斷じて兩弊が生じない汎神一神融即圓滿せるものが即ち日蓮聖人の宗教なのである、等云云。

大體以上の五項に就て本多上人と山川氏との意見を對照して見ますれば

其一に於ては山川氏は日蓮聖人の五大部と云ふよりも寧ろ三大主著に重きをおかれて居ることが明瞭である、即ち「開目鈔本尊鈔の二大主著と安國論との內面的相關」及び「三大主著の生起に於ける相關々係」を一讀すれば、更に又最後の「開目鈔本尊鈔偏重すべからず更に安國論を加へて圓備せしめざるべからず」の說に依つても五大部といふよりも三大主著といふことに山川氏がどれ程力瘤を入れて居られるかを知るに足るであらう。然るに本多上人はどうであらうか徹頭徹尾何時でも處嫌はずに開目鈔を第一なりと固張されたでしようか、否決してさうではない、本多上人はそんな偏狹な御主張はなさらぬ、御遺文中の五大部八卷が最も重要な御遺文であるといふことは古來誰れも異存のないことで、而もこの五大部中にどれが一番よいとか、どれが一番重いかといふことは容易に申すべきでない、五大部の輕重優劣といふやうなことは考へない方が賢いのだ、五大部には互に相聯關して大聖人の思想が現はされて居る、一部宛に切り離して勝劣を論ずるなどゝいふことは甚だ僭越の事柄に屬するものとされて五大部を綜合的によく御講述下さつた、その詳說は一昨年六月から九月まで四ヶ月に亘つて統一誌上に揭載されてあるから御參照願ひたいのであります。

次に其二に於て本多上人の開目抄詳解の序文を引用して之に批難を加へられて居る。然るに『開目抄は日蓮教學の最高標準』であると稱揚された本多上人のお說は當然過ぎる位當然である、敢てこれは獨り顯本系丈けではない『鍵鈔』の如きもそれが示されて居る、開目鈔が了解されずば日蓮聖人の信仰にはしつくりと觸れないであらう、さうなつて來れば第一の御書となる譯である、かう申せば其一では五大部中に於て優劣は論ずべからずとしつゝ、今は第一と推すは矛盾ではないかと申されるであらう。そこには横に廣く眺めた時は甲乙がなくても、之を縱に深く究める時には上下を生ずること撞着ではない、譬へば人といふことでも人に甲乙を附くべきではない皆同樣に佛子であると申されよう、けれども或る仕事に對する適不適の撰定となればそこには多くの差別を見るように、今日蓮聖人の數百篇の御遺文中、教學に關する御書としては矢張り開目鈔が第一位なりとするは山川氏にしても其四に示された通り教門に於ける第一書なりと明かに認められて居る、而かも其二に於ては「開目鈔第一書との此の斷定は少くとも日蓮聖人その人の御自認とは相違する」と言ひ切られたのは山川氏の獨斷ではあるまいか、即ち山川氏が御遺文中に第一書なりとせらるゝは觀心本尊鈔であることを其四に述べられて居る、それに到る前に少しく開目鈔と本尊鈔の各の立場を山川氏の說其三に就て見よう。

其三に於て開目鈔が一期の大事ならば本尊鈔も當身の大事ちやないか、而も本尊鈔の心は二千二百二十餘年の間未曾有であるから本多上人の開目鈔第一書なりは大聖人の御念釋に背くとされて居る、是れ果して然るか。多くの人は今自分の言はんとする處を他に强く信ぜしめようとする場合には、これこそ第一だぞ、最も肝心ちやぞと注意するのは當然の事である。釋尊に於かせられても阿含經の中にさへ此の妙法はと仰せられて居る妙法は獨り法華經のみの占有ではないやうに。又日蓮聖人でも千日尼鈔や上野鈔には「夫第五卷は一經第一の肝心なり」とか「一代聖教の中には法華經第一、法華經の中には女人成佛第一なり」といふ類の御書は相當あります提婆品が法華經中の第一位とは無條件に人は承認致しませうか、或は又三澤鈔にある「佐前の法門はたゞ佛の爾前の經と思召せ」に依り立正安國論を捨てませうか、觀心本尊鈔の副狀に「佛滅後二千二百二十餘年未だ此書の心有らず」とあることを以て直ちに他の御書の全部を劣るとして、それを擔ぎ出し鬼の頭でも取つたやうに唯一の確證として本尊鈔を第一だとするにはあまりに早計ではあるまいか、爲て開目鈔をばどのやうに日蓮聖人が重視されて居たかは種々御振舞鈔にもある通り「去年の十一月より勘へたる

開目鈔と申す文二卷造りたり頸切るゝならば日蓮が不思議留んと思て勸へたり、此文の心は日蓮に依て日本國の有無はあるべし譬へば宅に柱なければたもたず人に魂なければ死人也、日蓮は日本の人の魂也」

日蓮聖人が四ヶ月間お勸へになつて御書き遺された御書が他にありませうか、大聖人が佐渡で「今日切る明日切ると云ひし程」に危險極まる中にあつて何時、死でも、殘る、弟子、檀、那の、悔なきやう、畢生の、大事、を、傾倒、して、開、目、鈔、は、出、來、上、つ、た、、換、言、す、れ、ば、、開、目、抄、こ、そ、日、蓮、聖、人、の、遺、言、狀、で、ある、、本、尊、鈔、なくとも、大、聖、人、の、出、世、の、本、懷、は、實、に、開、目、鈔、に、充、分、盡、され、た、譯、で、ある、、その事は三澤鈔にも示された「去ぬる文永八年九月十二日の夜龍の口にて頸を刎られんとせし時より後ふびんなり我につきたりし者共に實の事を言はざりけると思ふて佐渡の國より弟子どもに内々申す法門あり――此の法門出現せば正法像法に論師人師の中せし法門は皆日出でゝ後の星の光、巧匠の後に拙きを知るなるべし」と。山川氏は開目鈔に法門が顯されてなく、法門は本尊鈔のみと思ふは此の聖語をどう解釋するか……實の大事が開目鈔に顯說されて居ることに誰れか疑念を懷きませう、故に教義に於ては開目鈔第一書なりとは山川氏も共鳴されつゝ教義と法門と二分された山川氏の心持ちは私は了解出來ない。

そこで考へねばならぬことは日蓮聖人の宗旨は三大秘法であり三大秘法の中心は本門の本尊でありませう、この本尊は木像がよいとか惡いとか曼荼羅に限るそれも佐渡始顯が最も正しいとか、いや弘安年間の御染筆でなければといふやうな隨分珍妙の議論もある、又最近には本佛釋尊を力說するのあまりに南無釋迦牟尼佛の文字が小さいから多くの人は釋尊を輕く見るから宜しく中央の南無妙法蓮華經と同樣の大さに書き改めるが至當だと曼荼羅の改造論さへ出て居るが、果して日蓮聖人の御本意はそんな本尊の形式に最も重きをおかれたものであらうか。本多日生上人の本尊觀に於てはかう示されて居る、「文字式でも木像式でも又その形が多少の相違があつても根本の意義に差支ない限りは、共にこれを許して甲乙爭ふことなきを以てこの問題の歸結と私は考へて居る、さうして寫象式ばかりに拘泥しないでいつも

實在の意識につながることを根本觀念としなければならない、文字を拜しても南無釋迦牟尼佛と書てあるのはたゞ文字ではない、その御佛は今此處に實在なされて居る、來臨影嚮したまふといふところの感激が無かつたならば何にもならない」と。所詮日蓮聖人の御本尊は形式でない本佛常住、佛身實在の信仰であることが明瞭である、この實在觀念の意義を徹底的に完成せしめられたのが如來壽量品でありませんか、壽量品の難有いとか尊いとか申す一念隨喜の淨心は實に無始久遠實成の釋尊の常護、每自の悲願に感憤するが故ではありませんか、日蓮聖人の御精神は實に壽量品中心である、こゝに歸着すれば開目鈔と本尊鈔のいづれに宗祖の御本意が濃厚に顯はれて居るか窺ふに足りる、御遺文やお經文の中から都合のよささうなところを一句丈け拔き出して大聖の御本懷を忖度することは謹みたい宜しく達意的に最も大事な處を掴むことです。

其四は教相判釋に於て五段相對の最後が觀心であるから本尊鈔が第一書たることに到着すると山川氏は書かれて居るが、一體五重相對といふことを或る人達の間では立てゝゐるけれどもそれは餘計なことであると本多日生上人は教へられた。然らば日生上人はどうかと云へば「内外相對」「大小相對」「權實相對」「本迹相對」の四つである、そして其の最後には絕對判と云ふものがある、相對判と絕對判と云ふことを能く了解せねば日蓮主義の組立が判らない、「教觀相對」といふやうなことは天台の釋意から出たものに基いて立てたものでないかと思ふ。これも一句丈けを拔萃するが故に謬り易いので「迹門の大教起れば爾前四十餘年の大教亡じ本門の大教興れば迹門の大教亡じ觀心の大教興れば本門の大教亡す」といふことは本體の本法をば妙法不思議の一法に取り定ての上に修行を立つるの時、天台像法の修行は觀心の修行を詮と爲るに迹を尋れば迹門の教は廣し、本門を尋ねても本門も高くて極む可らず、故に末學の機に叶ひ難いから但己心に妙法を觀ぜよと云ふ意味で決して妙法を捨てろといふ譯でなく、若し妙法を捨てゝ觀心と云つても己心として觀すべきものがないではないかと日蓮聖人は立正觀鈔にお說き遊されて居る。觀心とは、經に依て觀を修する譯であるから

法華經壽量品を拾て、單に觀心が五段相對の落居だから等と申すことは大誘法大邪見天魔の所爲なりと日蓮聖人は仰せられて居る。觀心本尊鈔にも「觀心とは我が己心を觀じて十法界を見る是を觀心とは云ふ也譬ば他人の六根を見ると雖も未だ自面の六根を見ず自具の六根を知らざるも明鏡に向ふの時に始て自具の六根を見るが如し」と教の鏡なくして觀心は成立しない事を教へられて居る、單に己心觀といふやうなものではそれは宗教ではない、己心本佛といふやうな事に執はれては信仰の必要はない、故に觀心とは本多日生上人は信心なりと簡潔に申されて居る、山川氏の此說は乍遺憾取るに足りない、此一段に於ても開目抄第一なること頗る明白であらう。

其五に於て本多上人の開目鈔一點張りで特に壽量顯本の釋尊を高調するやうなことは眞宗や基督教の神觀と差はない、そんな一神教は弊惡がある汎神一神融即せるものが日蓮聖人の宗教だと山川氏は斷定を下されて居るが、寧ろそれは日蓮聖人の宗教でなくて山川氏の獨斷ではあるまいか、壽量顯本の釋尊を一神教として阿彌陀佛の有名無實な單一神教と並べたり、基督の萬物創造の唯一神教の神と一列に觀ようとする山川氏は餘程どうかされて居る。そして汎神一神融即といふ抽象的な名稱に甘んじて居るのは未だ壽量顯本の教主釋尊の實體に觸れてない證據である、されば本佛の御名をも釋迦牟尼佛と唱へずして南無妙法蓮華經佛だといふやうな奇拔な御名に落ち付くやうなことゝなる、日蓮聖人が南無妙法蓮華經佛などゝお唱へ遊ばしたことは淺學の私共の窺知出來ない事柄である、本多上人の本尊論にもある通り、開目鈔の釋尊即ち壽量顯本の釋尊は汎神一神融即圓滿といふやうな苦しいこと申さずとも日生上人の仰せらるゝ統一神の一言でよろしい。單一神教や唯一神教はこの統一神教によつては日出でゝ後星光の如きもので聊かもまごつくことは出來ないやうになつて居る實に明々白々の事實である。能く聞く言葉に人法一如といふたり、善惡不二邪正一如といふが、それは理窟の上で云ふので事實には人法一如の姿は見られぬ、邪正一如が實際であれば教の必要もない、教觀不二といふことも單なる理論としてトなく事實とすればどうか。所詮日蓮教學の對絕判は開目鈔に在りと教へられた本多日生上人の御主張は仰げば彌々尊いでありませんか、今更何も迷ふことはありません。今後も日生上人御遷化の後に於ては猶更ら種々の異說も起りませう、けれども幸に幾多の遺書に依つて少しも吾人の信仰に動搖は與へられませぬ、益々法統の正系をば愛護して行きたいものであります。以上匆卒の間に執筆して意を盡さざる点をば讀んで多謝致します。經に云く「柔和質直なる者は則ち皆我が身此に在て法を說くと見る」と

南無妙法蓮華經

本多日生恩師遺業遂行に關して

普く護法の志士に檄す

『五百年にして王者興る』とは夫れ古聖の言乎。大覺法王の金識に應じ靈山三佛の豫言に送られ十方三世の佛知見に照されつゝ玄悟去華意　塔中別付百諾の金言喜び禁じ難く、末法永遠の大導師として本化上行日蓮薩埵が、萬年垂教の法統を揭げて億萬迷妄の衆生を引導し、從容として弘安第五池上のほとり、一期の化導付法の化儀を遺しつゝ、悲風慟雨冥々として暗き天地威格の示寂を現じ給ひてより、法燈明滅六百餘歲擧宗軟風吹き荒びて剩へ宗義も地に塗れんとはする……あゝ將に當に王者も興らん此時に膺り、皇國烈聖の威靈王法復古尊王開國の大義と相ひ應じて、一實經王の道統を提げ祖道復古の法幢を飜し、高く本化別頭の教觀を唱へて洽く釋迦法王の一大佛乘に朝宗せしめ、據て以て統一的佛教大觀の大道を明かにしたる、即ち外には廣く世法の融會開顯を活斷して附佛法學佛法の外道見を叱正し、神儒佛三教融合の大謨を論じて日東文明の眞價を高調し、內には能く本門三秘の宗格を光宣して正法正義の歸趣を明かにし、萬法萬乘の正路を示して權實本迹の軌範を顯彰し、不惜身命の聖訓を實踐して法統を既墜にめぐらし得たる、眞乎、薩埵上行日蓮大聖人よりこのかた、克く能滅衆生闡の讖言に酬ひ

畢竟佳一乘の照鑑に契ひたる佛教信仰の典型的人格、儒教の聖賢　佛道の菩薩　皇國祖道の精粹として我大和民族の一大儀表　悠然として靈界君臨の一大法將たる、あゝうまし名『法華經の行者』てふ其の人とは誰ぞ、曰く沙門聖應院本多日生上人

我等が恩師大僧正猊下その人なる乎。

抑も人間の究竟目的は果して如何、吾人の一大天職は奈邊に存する乎、是れ吾人々類が第一に探究發得して始めて人生に安住するを得る根本到頭難解難入なる大問題に非ずや。若し吾人々類にして這箇の大問題に對する到底解決の能力無しとせん乎、萬物の靈たる至幸の人間に生れつゝも、安心立命の立脚地を得る能はずして吾人の一切の幸福は根柢より破壞せられ、あらゆる努力活動も遂に徒勞に歸し榮辱苦樂浮沈興廢善惡正邪畢竟空にして吾人々間なるものは永劫無際の時空に介在する一刹那頃の蠢動に過ぎず、無常の暴風襲ひ來るや忽ちにして矢よりも疾き一生を空過し去り全く黑闇々の無底抗に陷沒して永へに出期無く、無明墮眠の街巷に流轉彷徨する最も憐むべき一微物たるを奈何せん。夫れ然るか噫果して然るか、否　否　吾人はそも何等の至福ぞ、今や此の大問題の正答を聽くの光榮を得たり矣、……何ぞや曰く實に吾人は誠に遭ひ難き佛法に遇ひ奉りて吾人々生の眞趣を悟了し其の永劫不滅の大向上に參はる可き無上の大良藥大良導師に面奉値遇して歡喜大歡喜に住するに至れるなり、げに盲龜の浮木に於ける感無くんば非じ、あゝ

夫れ本地大覺三即一身事智悲妙相功德圓滿たる無始常住の大恩教主南無釋迦牟尼佛本師世尊慧光照無量の慈眼を以て我等人類の究究目的を妙法華經に示してのたまはく、『我れ諸の人類を見るに悉く苦海に沒在せり、深く五欲に着して生死の險道に迷ひ冥きより冥きに入りて出離の要道を志求せず、是れ何たる憐むべき者ぞや、今我れ汝等を救濟せんが爲めに此の界に來れり、汝等大信力を出して諦かに聽け、如來には秘密の大神通力あり此の力能く汝等一切を拔濟せん、汝等一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命をも惜まざれ、我れ今汝等の爲めに誠諦の言を語らん、夫れ離苦得樂斷迷開悟出離生死證大菩提こそ是れ汝等の究竟目的なるぞ、汝等煩惱業苦の迷あるが故に六道生死の流轉あるなり、無上大菩提を證得せば淨妙第一不壞の至樂を得ん、元品の無明を斷盡せば慧光照す事無量ならん、佛智を開顯せば生死の迷夢を破り、微妙の淨相莊嚴巍々として圓慈の力用形聲自在ならん、常樂我淨の四德波羅蜜は汝等の信力に由りて獲得すべし、汝等未法の我が愛子よ本未有善の初發心よ、我は五百塵點劫來汝等を愍念せるなり、汝等が一念發心誓願の功德は無量無邊なるぞ、いで頓に大信力を發して速かに我れに隨喜し來れ、我れは晝夜を舍かず汝等を守護す。我が是の生死解脫の妙法は地上幾百萬の學者たち數千萬年の間思慮分別をめぐらすとも、微塵だも識得することの得能はじ、況んや世俗の凡夫をや、まことに淳善の佛子に非ずんば不可得々々々善哉汝等眞佛子　如是の妙法は諸佛秘要の寶藏にして以信得入の法體なるぞ、我が每自の悲願は汝等愛子の爲めに熄むとても無き也、汝等智あらん者ゆめ疑ふこと勿れ、我は汝等の爲めに大良藥を造り、絕えず盡きせず大良導師を發遣せん、汝等此の良き法師に親近して佛を敬ふが如くに敬ひ、是の法師の手より我が授くる大良藥を服して復差えじと憂ふること勿れ』と。

嗚呼世尊は出世一大事の本懷たる妙法華經に於て丁寧反復人類の究竟目的を開示し給ひ、更に此の大目的に到達せしめんが爲に日蓮大聖人を日本國に出生せしめ給へり、抑も歸依三寶は世尊の示教、在滅二世に亘りて佛教信仰の正路なり、此の絕對的發揮を本化別頭の教觀と爲す。さり乍ら我等は大聖世尊にも値ひ奉らず、又日蓮大士にも亦値遇せで三寶の

名をも聞かざりき。今此の人界に生れ來て、そも誰人を師とはして生死の險路を踏み破り涅槃の境に導かれん。是の師是の法師是の好き良導の師　我が現世人界最後の生に於ける無上大菩提の法師こそ實に聖慈院日生上人　名にし負ふ如來發遣の聖者として幸緣廣生して我を救ひ給へるなりき。

『常に我れを見るを以ての故に而も憍恣の心を生じ放逸にして五欲に著し惡道の中に墮ちなん　是の故に如來は實には滅せずと雖も而も滅度すといふ　斯の衆生等是の如き語を聞いては必ず當に難遭の想を生じ心に戀慕を懷き佛を渴仰して便ち善根を種ゆべし』と。　金誡切々げに至理の御言葉なるかな。あゝ我等が恩師日生上人は耳順に餘るおん齡もて休みも無く化導を垂れ給ひつゝ、いかで世尊の召し給ひてや我が心遂醒悟の曉を期してぞ、あはれ寂光の雲に入り給ひ畢んぬ。

顧れば恩師が我等に賜ひつるみ惠みは、何物にも換へ難き唯一無上絕對のみ教なりしかば、又その大恩も唯一無上絕對のことにこそ。あゝ恩師が大恩無量億劫兩肩に荷負すとも、いかで報ひ奉る事を得べきやは。我は師の君の大恩に咽び泣き師の君の賜に歡び泣き、さても忽ちにして別れ參らせし悲みに伏しまろび泣く

我は人の世に生れ來てげに別るゝの嘆きを知る身とはなんぬ、餘りにも無常なる此の世とや言はん、……さあれ恩師がいまはのきはの垂訓は、誠言皓々として我が心靈を照せり『汝等教義の精要を死守して佛祖の教訓と日本文化建設の爲めに盡して吳れよ是れ予が一期の本懷なるぞ』と　是よ恩師が此の土の教化の最後として、老幼と云はず男女と云はず貴賤となく上下となく普く門下の信男信女に最後にのたまひ遺きつるみ言葉なりき、苟くも日生恩師の教恩を蒙れる者、いかでか此のみ言葉に酬はではあるべき、いかでか無窮の大恩に報ひ奉らではあるべき。さては如何にしてか此の報恩の誠を如實には擧げ得べきぞ。夫れ恩師は宛も色心二法の不離なるが如く、一面には心靈界の光明として日蓮教學の宣揚に努め、他面其の身體的機關として正定聚の團結の必須なるを悟り、之を結成して『統一團』と名づけ恩師自ら之を率ひ、　殊に御晩年に於ては其の將來を遠謀して、統一團擁護の協賛會を作り、玆に日蓮門下否普く天下の志士を網羅し、固より信仰の本尊節持の正境を卓立して、廣く護法の大運動を起し一國の風教を唱導せんとせられたるなりき。　而て恩師は臨滅に至るも尙慈言縷々、法統の擁護を嚴訓し、又以て斯の教團の後事を託せられたるなりき。抑も本期團の使命とは何ぞ、曰く、　第一佛祖正脈の法統を擁護する事、第二我國精神文化の精髓を體系的に發揮する事、第三此に適當する學風を振起する事、第四時代對應の教化を研討して之を實行する事、第五小にしては日蓮門下の爲め大にしては我國文教の爲めに毎に覺醒を促しつゝ嚴然として統一の學風と教化とを守持する事是れなり、　機關紙『統一』は實に此の爲めに發刊せられて明治の中葉より既に三十餘年終始一貫此の大主張を論道し來る。夫れ統一とは何をか言ふ、曰く小は一心の統一より日蓮門下一宗の統一佛教統一思想統一文明統一世界人文の統一大成に及び遂に盡十方法界に於ける統一的無量の應作を觀ぜんとはする　是れ統一の內包なり是れ統一の外延な

り、是れ我が恩師畢生の大主張なり、教旨の正明、研學の濶達、活動の旺盛、抱負の雄大、是實に我が統一團の標語なるが、其實力を發揮せんとすれば更に彌々其の基礎を鞏固にし其の施設を完備して此の淨業を擴大すべく、大いに廣く同感の士の幾多の佐助を懇望勸説する無くんば非ず。此に於てか吾人同志は奮然蹶起して普く天下護法の志士に檄す、　夫れ佛祖法統の擁護と言ひ、日本文化の建設と言ひ、將又實に此の二大旨趣の爲めに一代の心血を注ぎ一期の身命を捧げて壯烈凜乎たる大活動をせられたる我が祖國の偉人一大恩人皇國歴史の精華たる——やよ卿等！けに卿等みづからの久遠の生命のまさしき恩師たる本多日生上人大僧正猊下のいとも懇ろに囑せられたる遺業遂行の淨業に關して、夫れ或は日生上人全集の出版と言ひ或は上人藏書の保管と言ひ、或は上人紀念會館の建設と言ひ、或は統一誌の繼續發行と言ひ、或はあらゆる日蓮主義布教傳道の發揮と言ひ、曰く開顯統一的佛教の大觀曰く神儒佛三教の貫串大成曰く東亞の光明を以て泰西を照す……是れ皆上人へのまことの報恩にして更に皇國の歴史に光澤あらしむるもの、況んや是れ上人の精神魂魄將又其の神彩を不朽に傳へて、遙かに天下後昆の士を引導する所のもの、嗚呼何人か翕然として擊節讃歎せざるべしや、乞ふ普く天下護法の志士　沛然として護法護國の大誓願に乘じ、來り來つて我が大恩師の遺業に關する一切の外護を全うせよ　善哉如是大佛事此の淨業を遂行せしめよ。　あゝ人生五十如何にしてか生くる、飽食暖衣

醉生夢死せば金殿玉樓死して何かせん、夫れ『身命に勝る惜しき物無ければ身命を布施として佛法を習へば必ず佛と成る』實にや身命を法に捧ぐる程の者のいかでか他の寶を惜しむ事のあるべしやは、知れよ壽量の得益は時衆の供養と進み、更に如來の神力十方に轟けば大衆は仰ぎ見て遙散供物となんぬ、あゝ　世尊は滅後末法の今時に於て如說修行の者としあらば之を供養讃歎せよ、如來を供養するよりも勝るゝ事百千萬億倍なりとのたまへり矣

見よ今や無神論反宗教の妖雲汝が祖國を覆へり、そも卿等は我が日生恩師最後の御遺誡を奈何にはする、起て！全日本の青年士女、起つて我が祖國の偉人と祖國の文化とを守れ、起つて自行化他の大慈悲行に邁往し異体同心の祖訓を体して健鬪せよ、卿等夫れ克く血脈一貫して護法護國の大事に起たば、豈今日の如き微力にして止まんや。あゝ廣宣流布の金言は如何にせし、あゝ無令斷絶の梵音は如何にせし……否　否　天地は六種に震動せり、見よ今年日蓮大聖人六百五十遠忌の年に當り、併も見よ正に第二の日蓮たる我が日生恩師現滅の直後に當り、反宗教運動の妖魔軍は却て元品の無明の大地を破擊して寶塔を虛空に懸らしめ、大音聲を放ちて一實經王に證明を與へ、更に進んで財團法人統一團に善哉を叫び、如來は十種の大神力を現じて大勢威猛の弘經者を勸勵し、又來集の團員に讃美の妙音を放ち給ふの奇瑞は、今ぞ實に現在前するには非ずや、起て！普く天下護法の志士　此の風雲に乘じて佛教を復活せよ　振へ！不惜身命の清信士女　あゝ偉なる哉人中の師子王

見よや『今正是其時』とは三千年前の昔話に非ずして、まさに昭和現代の今日今時なるぞ　嗚呼吾人は歡天喜地せざらんと欲するも夫れ得べけんや。

財團法人統一團は靈山會上の法座を移して我が國に置き、佛祖の密旨を奉持して自他圓滿なる樂園を顯はさゞる可からざるの大任を帶びたり、其の職責使命たる重且つ大なり、六難九易の說ある蓋し所以無きに非るなり、嗚呼本財團の目的を宣揚し大成せしめんとするには非常の贊成者あるに非ずんば、何を以てか『我本立誓願欲令一切衆如我等無異如我昔所願今者已滿足』の有終の美を見ることを得んや

嗚呼　聖應院本多日生上人　我等が大恩師の遺訓を奉じ、其の萬世不朽の遺業を成ぜむと、茲に統一團擁護の運動は、即ち本佛世尊の敕使として現れ、人類究竟の目的を開示し、之に到達するの大直道を指示して、大白の乘輿を供せんことを指導する唯一無二の指南車なり、生死の長夜を破る大日輪なり、無明の大賊を切る降魔劍なり、やよ普く天下護法の志士　師子奮迅の勇を鼓して來り賛せよ

南無妙法蓮華經

日生上人を憶ふ

（其三）

付本月休載

は記事輯録に

記事

統一團を財團組織となすに就て

日生上人の御生涯は實に法統愛護の好範を適時示教されたと申上げてよい、即ちかの有名な四箇格言に始まり、中葉に於ける講演に著述に東奔西走の大精進も、晩年其要職を辭任遊ばした後も鳳志は一路法脈の擁護にあつた事は、何人も一點諍ふことの出來ない事實であつた。萬座の法筵等身の著書悉く是れ護法の一事のみ、『如來の所遣として如來の事を行ず』の金文を如實にお示し下さつた。日生上人が微妙の教旨を提げて正義の主張をなさる所、或は慈悲の折伏となり、降魔の利劍となる其純潔の道念は秋霜烈日の如く、之が爲めに無智の三類は怨嗟の哀音を連ね好んで過惡を揑造し數々擊蹶せんとするに至るも、上人は能く包容の大度量を以て不實な功德淺薄の增上慢をも美化し不輕菩薩の自任を以て終始せられて居た。正念不動一心精進の上人は四十餘年一日の如く適々護法の一大事に關しては奮然として蹶起された、法を愛するが故に中宵眠を紡ぐるやうなことも其晩年には時に拜された、是れ實に先頃統一團擁護會創業の發端となつた次第である、擁護會から協賛會に進み協賛會から一轉して財團法人統一團となる。爾り統一團と日生上人は二而不二である、日生上人幾多の法動は畢竟するに統一團の背景大に力ありと謂へよう。『設ひ正法を持てる智者ありとも檀那なくんばいかでか弘まるべき』師檀水魚の思を成すの時かゝる正定業は光輝燦然たりしに非ずやと申したい。病床に在せし上人は來る人毎に『今後十年大に教勢の挽回を期す』と語りもし、又文書にもされた、之を深思せば日生上人の思召が那邊にあつたかよく窺ひ知られるであらう。

財團法人統一團に就ては　日生上人の御在世ならば兎も角、御遷化の今日に於て其必要を認めない寧ろ不用論を稱ふる人もないではないが、夫れは御再考願ひたい。先月號に揭出せる協賛會趣意書にも明示されたる通り、本財團根本の使命とは第一佛祖正脈の法統を擁護する事である、法統の愛護は日生上人の在否に關係なく、卒直に申せば却て日生上人の滅後の方こそ大切でなければならぬ、その事に就ては「生師の靈現」に詳述されてあるが故に此所には省略する。次に我國精神文化の精髓を體系的に發揮する事、それは大きな浮業である、日生上人なればこそかゝる理想も實現されようが、今日となつては誰れがするかといふ懸念の人も尠くない。無論それは當然起るべき問題である、日生上人とてもお一人でかゝる實

現は至難とされて居た、矢張り廣く多くの共鳴者を獲て着々堅實に進まうと思召されつゝあつた。今や知法思國會は之を宣傳大綱として、帝都に於ける日蓮門下の各派が悉く個人的に結合し、異體同心となつて口に筆に連日連夜精進して居る、日生上人御理想の門下統合運動が御遷化記念として事實化して來たことは遙かに靈山に在して御照覽遊ばされ、善哉善哉と宣はせられて居るであらう。本財團の使命が早く一歩先じられて居ることを見る時に何と愉快ではあるまいか、上人の冥護に合掌禮拜する次第である。其他本財團の將來に於ける重大な任務の遂行に關しては相當なる施設を要することと自明の理である、そこに別揭の寄附行爲案を以て各位の護法心にお訴へするに到つた。大正九年の歲末に今の宗務總監笹川日堂師は統一團を財團組織に爲すべき建議書を提出された位に具眼の士は早くから財團組織を叫ばれて居る、私共は甚だ微力到底其の任ではないが、日生上人の大命を拜せる者、誰で上人と御緣のある方々にお願ひ致したい。

統一團協賛會が、明春日生上人一周忌に於て財團組織として何をするのかといふ御質議が一部の人から發せられたに就て、其一二は既述の通りであるが更に具體的に摘記せば、先づ遺稿の整束である、それには第一に大藏經要義の續刊といふことになる、大藏經要義が現在十一卷で未完成のまゝとなつて居る、姉崎博士はあと一卷位に纏めてしまへばといふことを　日生上人御在世時代に話されたが、上人は更に數卷の拔萃をなさつて居るからこれを一日も速かに出版したい。次には開目鈔詳解の下卷、これも各方面の希望者が澤山ある、尤も其の御請求なくとも御遺文の全體に亘る聖訓摘要を結成する計畫を樹てつゝある、而して是等は日生上人の御遺業の一端として奉仕させて頂く、其成否は懸つて諸賢の清淨なる御後援にあることを思ふ時に、私共の意のある處を御參酌下さつて最大なる御力を爲法國お願申上ぐる次第である。

猶一言附加しておきたい事は、私共の運動が反宗團運動だとか、宗門を袖にするものだとかいふ惡宣傳を逞ふし、破和合僧の大逆を敢てなす者がないでもないといふ事を仄聞致しましたが、そんな事は常識を以て判斷して頂けばよろしい、私共は左樣な偏狹な又同門で蔑視する程の餘暇はない、否々廣宣流布の大願を以て皆歸妙法の運動に參加しつゝ僅かの事柄に捉はるゝ我見は更にない、唯一意日生上人の遺命を遵奉し、護法愛國の爲めに身命財を捧げて居る者であります。或人は協賛會の役員中には宗門僧侶の名は出てはゐないといつて暗に中傷せんとするが、それは日生上人自ら御選定遊ばして居たので、敢て私共の兎や角するの要はない。併し滅後の今日は多少考慮せねばならぬから、勿論井村管長にも懇談した、從つて管長の御領解もあり時機さへ熟せば管長自ら陣頭に立つて萬般の御指導を下さるやうにもなるであらう、又宗門の他の者宿迷も個人的には大に賛同激勵されて居るから、私共は佛天御照覽の下に正々堂々と僧俗同舟の思で、日生上人の御精神たる情操感激に生き名聞利養を捨て扶宗興學報恩謝德の意を以て、上人の遺業を實現せしむべく猛進致します幸に諸賢の深厚なる御援助を與へられんことを重ねて爲法爲國に切望して止まざる次第であります。

左に協賛會會則並に財團法人統一團寄附行爲案、寄附金及醵出金募集規定等を揭載して、各位の御賛同を仰ぐものであります。合掌

統一團協賛會會則

第一條　本會ハ本多日生上人ノ遺志ヲ繼承シ上人畢生ノ事業タル統一團ノ趣意ニ則リ其ノ事業ノ發達ニ協力シ同團設立ノ根本精神ヲ發揚セシムルヲ目的トス

第二條　本會ハ其目的ヲ達成スル爲メ左ノ事業ヲ執行ス

一、財團法人統一團ヲ設立スルコト

二、其他理事會ノ決議ニ依リ必要ト認メタル事業

第三條　本會ハ統一團協賛會ト稱ス

第四條　本會ハ事務所ヲ東京府荏原郡品川町南品川四一二妙國寺ニ置ク

第五條　本會ノ資產ハ寄附金及醵出金ヲ以テ之ニ充ツ

第六條　本會ノ資產ハ理事會ノ決議ニ依リ理事長之ヲ管理ス

第七條　本會ノ趣旨ニ賛同シ本會ノ資金ヲ寄附シタル者、又ハ之ヲ醵出スル者ヲ會員ト稱ス

第八條　本會會員ハ左ノ六種ニ區分ス

一、名譽會員

本會ノ爲メ特殊ノ功勞アリタル者、又ハ一時若クハ數回ニ金千圓以上ヲ寄附シタル者ヲ理事會ノ決議ニ依リ推薦ス

二、特別會員

一時金參百圓以上ヲ寄附シタル者、又ハ五ヶ年間每年金百圓以上ヲ醵出スル者

三、甲種正會員

一時金百圓ヲ寄附シタル者、又ハ五ヶ年

間毎年金貳拾四圓ヲ醵出スル者

四、乙種正會員

一時金五拾圓ヲ寄附シタル者、又ハ五ケ年間毎年金拾貳圓ヲ醵出スル者

五、丙種正會員

一時金貳拾五圓ヲ寄附シタル者、又ハ五ケ年間毎年金六圓ヲ醵出スル者

六、準　會　員

金貳拾圓以下五圓以上ヲ寄附シタル者、金五圓以下ノ寄附金ハ篤志者ノ志納トシテ之ヲ取扱フ

第九條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

理事　十五名以内

監事　若干名

第十條　理事ノ互選ニ依リ理事長常任理事及ビ會計理事各一名ヲ置ク

第十一條　理事長ハ理事會ノ協賛ヲ經テ會務ヲ統理シ本會ヲ代表ス

第十二條　常任理事ハ常務ヲ處理シ理事ハ會務ヲ執行ス

第十三條　理事長事故アルトキハ常任理事其事務ヲ代理ス

第十四條　監事ハ會計ヲ監督ス

第十五條　役員ノ任期ハ三ケ年トス　但シ重任スルモ妨ゲナシ

第十六條　役員ノ任期滿了スルモ後任者就任スル迄ハ前任者其職務ヲ行フ

第十七條　本會ニ顧問若干名ヲ置ク

第十八條　顧問ハ理事會ノ諮問ニ應ジ重要ナル會務ニ參與ス

第十九條　顧問ハ理事會ノ決議ニ依リ理事長之ヲ委囑ス

第二十條　役員及顧問ハ無報酬トス　但シ常任理事ニ對シテハ理事會ノ決議ニ依リ手當ヲ支給スルコトヲ得

第二十一條　理事ヲ以テ理事會ヲ組織シ重要ナル會務ヲ審議ス

第二十二條　監事ハ理事會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第二十三條　理事會ハ必要ニ應ジ理事長之ヲ招集ス

第二十四條　理事會ノ議事及決議ノ方法ハ一般會議ノ例ニ依ル

第二十五條　本會ノ事業年度ハ曆年ニ依ル

第二十六條　本會ハ財團法人統一團ノ組織完了シタル後之ヲ解散ス

第二十七條　本會ノ殘務ハ財團法人統一團之ヲ繼承ス

財團法人統一團寄附行爲案

第一條　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國の大義を宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スルヲ目的トス

第二條　本團ハ其ノ目的ヲ達成スル爲メ左ノ事業ヲ執行ス

一、本多日生上人ノ遺稿ヲ整東シテ之ヲ上梓スルコト

二、日蓮教學講習會ヲ開催スルコト

三、日蓮主義講演會ヲ開催スルコト

四、毎月一回團報(統一)ヲ發行スルコト

五、前各號ノ外評議會ノ決議ニ依リ必要ト認メタル事業

第三條　本團ハ財團法人統一團ト稱ス

第四條　本團ハ事務所ヲ東京府荏原郡品川町南品川五丁目四百拾貳番地妙國寺内ニ置ク

第五條　本團ノ資產ハ左ニ掲クルモノヲ以テ之ニ充ツ

一、日蓮聖人六百五十遠忌記念ノ爲メ本多日生上人報恩謝德ノ意ヲ以テ本團基本財產トシテ統一團協賛會ヨリ提供セラレタル大日本帝國政府發行五分利公債證書額面金參萬圓

二、本團ノ主旨ヲ賛スル篤志者ヨリ受入ルル寄附金及醵出金

三、本團ノ資產ヨリ生スル收入

四、本團ノ事業ヨリ生スル收入

五、雜收入

第六條　前條第一號ニ掲クルモノ及本團ノ主旨

ヲ賛スル篤志者ヨリ特ニ維持金トシテ寄附セラレタルモノハ之ヲ基本財産トス

第七條　前條以外ノ資産ハ之ヲ經常財産トシ本團ノ事業費及事務費ヲ支出スルノ財源ニ充ツ

第八條　本團ノ資産ハ評議會ノ決議ニ依リ理事長之ヲ管理ス

第九條　本團ノ爲メ特殊ノ功勞アリタル者ハ評議會ノ決議ニ依リ之ヲ名譽團員ニ推薦ス

第十條　本團ノ資金ニ充ツル爲メ一時金參百圓以上ヲ寄附シタル者又ハ五ヶ年間毎年金壹百圓以上ヲ寄附シタル者又ハ五ヶ年間毎年金參拾圓ヲ醵出スル者ハ之ヲ維持團員ト稱ス

第十一條　本團ノ資金ニ充ツル爲メ一時金壹百圓以上ヲ寄附シタル者又ハ五ヶ年間毎年金參拾圓ヲ醵出スル者ハ之ヲ賛助團員ト稱ス

第十二條　本團ノ資金ニ充ツル爲メ一時金參拾圓以上ヲ寄附シタル者又ハ毎年金參圓ヲ醵出スル者ハ之ヲ普通團員ト稱ス

第十三條　團員ニ對シテハ本團ヨリ發行スル團報（統一）ヲ無料ニテ頒布ス

第十四條　本團ニ顧問若干名ヲ置ク

第十五條　顧問ハ理事會ノ諮問ニ應シ重要ナル團務ニ參與ス

第十六條　顧問ハ理事會ノ決議ニ依リ之ヲ委囑ス

第十七條　本團ニ左ノ役員ヲ置ク

理事　拾五名
監事　參名
評議員　六十名以内

第十八條　理事ノ互選ニ依リ理事長一名及常任理事一名ヲ置ク

第十九條　理事長ハ團務ヲ總理シ本團ヲ代表ス
理事長事故アルトキハ豫メ理事會ニ於テ定メタル他ノ理事之ヲ代理ス

第二十條　常任理事ハ常務ヲ執行ス

第二十一條　評議員ハ重要ナル團務ヲ審議ス

第二十二條　理事及監事ハ評議會ノ決議ニ依リ之ヲ選任ス

第二十三條　評議員ハ維持會ノ決議ニ依リ之ヲ選任ス

第二十四條　役員ノ任期ハ三ヶ年トス但シ重任スルモ妨ナシ
補缺ニ依リ就任セル役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第二十五條　役員ノ任期滿了スルモ後任者就任スル迄ハ前任者其ノ職務ヲ行フ

第二十六條　顧問及役員ハ無報酬トス但シ常任理事ニ對シテハ理事會ノ決議ニ依リ手當ヲ支給スルコトヲ得

第二十七條　理事會ハ理事ヲ以テ組織シ必要ニ應シ理事長之ヲ招集ス
但理事三分ノ一以上ノ同意ヲ以テ要求アリタル時ハ理事長之ヲ開催ス

第二十八條　理事會ハ理事長ヨリ提議スル重要事項ヲ審議ス

第二十九條　理事長ハ理事會ノ開會ニ際シ議案審査ノ爲メ必要ト認ムルトキハ理事以外ノ役員ニ出席ヲ請ヒ意見ノ陳述ヲ求ムルコトヲ得
但シ表決ノ數ニ加フルヲ得ス

第三十條　評議會ハ評議員ヲ以テ組織シ必要ニ應シ理事長之ヲ招集ス

第三十一條　評議會ハ左ニ掲クル事項ヲ審議ス
一、理事、監事ノ選任及名譽團員ノ推薦ニ關スル件
二、財産管理ノ規定ニ關スル件
三、事業執行ノ規定ニ關スル件
四、豫算及決算ニ關スル件
五、寄附行爲ノ變更ニ關スル件
六、前各號ノ外隨時理事長ヨリ提議スル重要案件

第三十二條　維持會ハ名譽團員及維持團員及賛助團員ヲ以テ組織シ必要ニ應シ理事長之ヲ招集ス

第三十三條　維持會ハ評議員ヲ選任ス

第三十四條　理事會、評議會及維持會ハ議員三分ノ一以上出席スルニアラザレバ之ヲ開會スルコトヲ得ズ但議案ニ對スル文書ヲ以テシ意見ヲ通告シタル者ハ之ヲ出席者ト見做ス

第三十五條　理事會、評議會及維持會ノ議長ハ理事長ヲ以テ之ニ充ツ

第三十六條　理事會、評議會及維持會ノ決議ハ出席

議員過半數ノ同意ニ依ル但シ可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス

第三十七條　本團ノ事業年度ハ曆年ニ依ル

第三十八條　本寄附行爲ハ評議會ノ決議ヲ經、主務官廳ノ認可ヲ受ケ之ヲ變更スルコトヲ得

前項評議會ノ決議ハ議員三分ノ二以上出席シ出席議員ノ三分ノ二以上ノ同意アルコトヲ要ス

第三十九條　本財團ノ設立ニ際シ基本財產ヲ提供セラレタル統一團協贊會ノ會員ハ左ノ區分ニ依リ本財團ノ團員タルモノトス

一、統一團協贊會特別會員ハ本財團維持團員

二、統一團協贊會甲種正會員ハ本財團行助團員

三、統一團協贊會乙種正會員ハ本財團普通團員

第四十條　本財團設立當初ノ役員ハ本財團設立者ノ協議ニ依リ之ヲ推薦シ其ノ任期ヲ本財團設立登記ノ日ヨリ一ケ年トス

以上

◎備考

本財團ノ設立ハ統一團協贊會ノ理事其責ニ任シ之ヲ遂行スルモノナリ

寄附金及醵出金募集規定

申込期日

昭和六年十一月三十日（本會々則第八條及財團法人統一團寄附案第十條乃至第十二條第三十九條參照）

拂込期日

イ、一時寄附金　昭和六年十二月廿五日半額
昭和七年二月廿八日半額

ロ、第一年分醵出金　昭和六年十二月廿五日

拂込場所

本會事務所若ハ三菱銀行本店又ハ本會科金負擔振替用紙ニテ各郵便局

◎備考

昭和七年三月十六日聖應院日生上人一週忌ノ當日ヲ以テ財團法人統一團設立許可ヲ文部大臣ニ申請スル豫定ナリ

統一團協贊會醵出及寄附金領收報告

（八月十六日現在）

一金貳百圓也　横濱　岩上浦三郎殿
一金貳百五拾圓也　東京　柴田武治殿
一金參百圓也　同　岸野藤右衛門殿
一金壹百圓也　同　大谷權次郎殿
一金壹百圓也　同　山田英二殿
一金壹百圓也　東京　早川太吉殿
一金壹百圓也　同　佐野忠吉殿
一金壹百圓也　同　荻田淺次郎殿
一金五拾圓也　千葉　梶木顯正殿
一金五拾圓也　ホノルル　日比野妙鏡殿
一金貳拾五圓也　同　妙法廣布會殿
一金參拾圓也　横濱　貝塚敏二郎殿
一金拾圓也　東京　坂本泰造殿
一金拾圓也　同　難波芳松殿
一金拾圓也　同　田中きみ子殿
合計金壹千四百參拾五圓也
申込總額金壹萬六千參拾五圓也

以上

教報

宗祖六百五十遠忌紀念關西街頭布教日誌

鈴木うた子

日蓮聖人六百五十遠忌並に恩師聖應院日生上人の御遷化遊ばされた大切な年なるが故に御報恩の萬分の一なりとも酬ひ奉らん爲めに、日暮光道さん、時澤道夫さんと共に關西街頭布教を企てました。

○七月二十四日、出發に際し品川妙國寺に參り恩師聖應院日生上人の墓前に詣で、御家族や磯部先生から勵みの御言葉を戴き、感謝の念に滿されつゝ東京驛を立ちました。

○二十五日午前六時十五分名古屋に到着、早速常樂寺に行き、夕方教化會館に送られて參りました、夜は原田上人の御弟子方や、名古屋統一團皆々樣の御應援により聖廟前にて第一聲を擧げました。蒼天にもかゝわらず聽衆

百五六十人、十時半頃まで續けました。

○二十六日、雨天にて晝は中止し夜は原田、清水兩上人の御盡力に依り教化會館にて、時澤さんは「愛國心は燃ゆる」、日暮さんは「苦等の使命」、私は「宗教信仰の喜び」の演題の下に話させて頂きました。祝下のことに就いて御話をする積りで居りましたが、祝下と言ふことを申しますと誤が出て續けて申すことが出來ませんから話の間にちよい〳〵お入れして御話しいたしました。聽衆の中には涙を流して居る御方もお見うけ致した。私は遂に堪へずしてテーブルの上に頭を下げて四五分間無言で居りました、其時は一時間程話し續けた頃です、皆様の感激して居る御顏を見ますと私は向一層涙が出ますので「皆様大變失禮いたしました、今晩はこれで失禮させて戴きます」と申上げまして演臺を降りますと、原田上人が「鈴木さん御苦勞さまでした、貴女の熱心なことには感服いたしました、今後もしつかりやつて下さい、私達も來月から辻説法を致します。」と御やさしい御言葉を頂きました時、私は嬉しいやら御恥しいやらで勿體なく唯々合掌いたしました。來聽各宗の人々も感激の餘り事務室まで來られて涙み入る御挨拶をうけました。

○二十七日は丁度東京から宗學林の學生團が先生と共に一行五名が教化會館へ夏期布教を目的に乗り込んで來られた、學生達はその夜教化會館で開會すると云ふ事であつたので、私達は晝食を終ると日暮、時澤、私と一行三名は何しろ街頭布教が目的であるのですから仕度を整へて名古屋驛前と云はれる錦卷公園で開會すべく教化會館を出ました、熱心な婦人會員統一團の方々は暑いのもいとはず應援の爲に御同行下さつて午後一時頃から同公園で開會、始めに時澤さん續いて私と約二時間斗り眞情を吐露いたしました。集まつた聽衆は數百名炎天にさらされつゝ聞いて下さいました、その時例の「おまはりさん」がやつて來て『此處は誰人も無許可では出來ないことに成つて居るので、私としては貴に皆さんの御主張には賛成して居りますが役目上申譯が無いから之れで止めて貰ひ度い』との流石に關西風の物腰しのやさしい言葉で頼まれたので殘念ではあつたが熱心に集まつて呉れた聽衆を殘して日暮さんの番であつたけれ共中止して解散することにいたしました。それから未だ夜の開會までには時間があるので一行は夜七時からの會館に於ける學生團講演會の宣傳をして上げやうと云ふので歸途要所〳〵で代る〳〵その講演會の宣傳をやりつゝ引上げました。

同夜は名古屋の信する者も信ぜざる者もそろ〳〵と會館へ集まつて來たが私達は屋外で開會の考へでしたから定刻には再び同志三名は縣廳前の廣場へと出向きました、直ちに開會三名が論じ去り論じ來れば聽衆は益々數を增して時の過ぐるを知らず、すると會館の方から信者の方が私達を迎ひに來て呉れました、が然し私達としては一行三名が出るのであればよいけれ共、其の中の一人丈が出ると云ふのでは工合が惡い、と云ふのでその方はお斷りいたしました、すると此度は立正大學の學生が四五名でヤツテ來られて「貴は私共は十名で十日間の豫定で名古屋で紀念傳道を寺々でやるつもりで參つて居る者ですが是非何んとか繰り合せて御滯在の上應援を願ひ度い」と申込んで來た、何しろ私達は各地共開會の日定が前以つて取つてあるので突然では如何ともする事が出來ない、之れが何より殘念でありましたが、その事を懇談してお斷りするより外に途はない、丁度十一時過まで開

志は暑さを忘れて熱心し聽衆も赤涙を流して聞いて呉れました、先夜の石上さんの妹さんもその内に來られて感激されたと見えて私の手を取つて「皆さん有難う〳〵、私の様な者にも何かお手傳する仕事が有りませうか、私は一體何うしたらよいでせう……」と、眞に感極まつた御様子でありました。十二時近く一行は宿舍に當てられて居る教化會館へ引き上げました。宗學林の學生團と同宿であつたがお互ひに感謝と感謝に滿ちた心を懷いて夢の間にその夜を明し、翌朝は一同益々元氣で京都に乗り込む準備を急ぎました。廿八日午後零時廿五分、原田、清水兩上人を始め多くの信者の方々の見送りを受けて名古屋驛を後に京都へと向つた。

○二十八日、京都へ午後四時廿分着、學林生は本山妙滿寺へ、私達は寂光寺の上田上人のもとへ落着いた。旅裝を解く間もなく一應本山へ敬意を拂つて來やうと直ちに本山へ參拜その夜學林生達は本山の境内にテントを張つて開會される豫定であつたやうです、何しろ私達には京都は不案内ですから今晩開會の場所を川崎部長さんに相談した所が「三條大橋の所がよいでせう！」との事でしたので兎に角場所を其處と定めて出發、直ちに即是道場京都に於ける第一夜を迎へて開會した、處が咽喉から血の出る程喋んでも一向聽衆が集まらない、それも道理、鴨川の水が轟々と音を立てゝ足もとを流れて居るから、私は殘念ではありましたが其處を捨てゝ同志に場所の變更を相談し、千本三條の銀行前で再び開會、處がまた、〻く間に數百人の人々が集まつて來てさすがに廣い道路も立錐の地無しと云ふ有様に一同こゝぞとばかり入り替り立ち代り正義の雄叫びを擧げて居る内に京都居住の同志河合陟明さんが應援に來て下さいました、時を移す事正に十一時を過ぐる廿分、聽衆は釘づけの様になつて去る事を忘れた形ち、同銀行の宿直の人々は室の中からモットやつて呉れ……と云ふので拍手して歡迎して下さる有様、實に氣持ちのよい一夜でした、私達は寂光寺へ十二時半頃歸つて來ました。

廿九日は同志松岡林造氏一行が「愛國心は燃へる」のパンフレットを數萬部持參して正午頃寂光寺へ着いたので直ちに協力して本山正門前を川崎部長さんの御了解を得て會場に充て、午後一時半頃炎熱燒くが如き中をものともせず一行は開會、終つて五條の公園前へと出發し、直ちに開會、何しろ出發に當つて一寸日暮さんの事でグズついた爲に夕飯を取る時間が無くて十一時過ぎまで立ち通し、お腹が減つたのと疲れたのとでガツカリして終つて日暮さんも私も一寸へこたれた形ち、然し聽衆を見ると少なくも五六百人は居たでせう、何しろ到る處盛會又盛會それを思へば疲れも自ら忘れさせられる、十二時近き頃か寂光寺へと引上げて來た。

○三十一日、神戸への途中大阪へ下車パンフレットを受取つて再び乗車神戸の立正寺へ着いた。婦人會及會員十五六名の方々の應援を得て夜七時から神戸公園で開會來會者數百名ヤツタ〳〵燃へる意氣で日蓮主義の心髓を引つ提げて信仰の喜びを一晩中熱狂した聽衆の前に叫びつゞけた、ナルモヤツタが聞くも亦能く聞いた四時間の長い間を身動きする者も無い熱心振り、十一時を過ぎたので閉會を宣する事にした。その夜寒に着いたのは一時過ぎ、篠井上人は御病氣の爲臥床中であつたがやはり布教熱の盛んな方だけに大阪を濟せたらも一度引つ返して來て呉れ、と呉れ〳〵もお願しやつて下すつたのには一同感激しました。

○八月一日、大阪を志して神戸を午前十時出發同十一時廿幾分大阪着、時澤さんの骨折りで蓮成寺を宿として旅装を解いた。同夜は同寺の立正青年團員に應援して頂いてモヨリの郵便局前に七時から開會、この日は天候甚だ危うく今にも雨になりさうな氣ハイ、でも一行は心に止める事も無く勇ましく開會大阪もまた故題師本多上人御師子吼の因縁ある土地開會すれば聽衆は四方から三三五五集まつて來た時間が經つに從つて人垣が二重三重と重れられて行くその内に猛烈な風さへ加はつて來て九時頃になつたと思はれる頃から雨が降つて來た、それに雷鳴り渡つて猛雨暴風一同殘念ではあるが思ひ切つて中止を宣した。でもパンフレット數百部は配布する事が出來た事を喜んで宿舍へ歸つたのは十時頃でいもあつたらふ。

○二日、愈々今日こそは今回企劃した第一回紀念傳道の最後の日である、然し到る處熱に於て聲に於て努力に於て全力を擧げて來た爲に咽喉をスッカリ傷めて終つて爲に身體に多少熱が出てさへ居る樣に感ぜられたが、何んとしても今日一日が最後だと思ふと心淋しい樣な氣がする、日の中は本多祝下の末のお嬢さんが嫁して居られる友廣家を訪れる事にして時澤さんのお母さんと同道和子樣にも御面會東京の話大阪の話とそれからそれに話が移つて信仰談から餘りにも時を移したので心を殘して歸路についた、夜は一行が二隊に分れて一隊は前晩の郵便局前一隊は鴻の池銀行前の二ヶ所で開會、兩方共に盛會であつたが特に銀行前の方は道路が全く塞がれて終つた、何しろ全員共に今夜が最後の晩だと云ふ氣持が有るので自ら意氣が擧つて眼は益々輝き口からは熱火が吐かれるかと思はれる位、私は銀行前に所信を語つたのですが堂園寺の京藤上人も應援の爲めと云ふので甘分斗りお話をして下すつて最後日暮さんで會を全く終りましたお其の時十九か廿位の感激した吉弁と云ふ一婦人が出て己れの過去を懺悔すると云ふやうな事もあつて最後の夜としては充分開會の意義はあつた事を感じました。一同が蓮成寺へ歸つて來たのは十一時を過ぐる頃であつた。

これで私達第一回紀念布教は終つた譯ですが未熟な私達の爲に各地到る處の信者の方々お上人の方々の何かと御心添へを下さつた事、お宿を與へて下すつた事は幾度にも有難う御座いました、心の丈にとても筆紙には記す事が出來ません、無事所願を達して歸京する事を得ましたのは實に皆樣の御陰でございます、私達は謹而茲に佛祖照鑑の御前に願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道と法樂し參ります。擱筆に當りまして結緣外護の皆樣の爲法爲國御健勝を遙かに御祈り申上げます。合掌

知法思國會街頭布教

七月は雨天續きで一週間の内二日は出來なかつたが、八月は幸にも晴天で十六日より廿二日まで七日間、市の内外に亘つて盛んに御啓一觀となつて知法思國、立正安國の叫をあげ多大の効果を收めた、詳報は「教」誌上に掲出されるから茲には省略する。

◎正法寺便り

（早稲田南町）

八月九日（例會毎月第二日曜日午後七時より）聽衆七十餘名　風無く非常に蒸暑い夜であつた。講題及講師

宗教をして阿片たらしむる勿れ　木村　至誠師

佛教修行の要旨　木村　日保師

○除吉九月十三日　會場正法寺　講題及講師

和光同塵　工學士　野澤　一郎氏

生活即宗教　文學士　木村　敬之師

宗教の生命　僧正　木村　日保師

◎大阪教報

○六月一日　蓮成寺にて東、清原、南、阪上德永、淺邊、藤山の各氏熱辯を振はれ最後に强く正しく活きよ　京藤　義應師

○十二日　堂園寺にて

生死一大事　藤山　本成師

法華一乘の道　川崎本山部長

○十三日　蓮成寺にて立正青年團發團式京藤師導師の下に最盛なる法要を修し團長松村少將の訓示、河合、京藤兩師の親辭等ありて頗る盛會を極めたり。

○二十二日　堂園寺にて故人弁口・石井兩先輩の追悼法要を修し德永、清原、平山、南、藤山諸氏の感想談ありて夜の耽るを知らず解散せしは十二時なりき。

○二十六日　若林宅にて

逆境の恩寵　京藤師

○二十八日　蓮成寺吉永日洋師晋山式弁村猊下を始め金光管事青年團婦人會等の親辭各地よりの祝電多數ありて盛會なりき、大阪教團も新進の吉永師を迎へて今後の活動大に戴るべきものあり。

○七月一日夜　蓮成寺にて

吾等の使命　京藤師

本尊に就て　吉永師

○八日　住吉公園にて立正青年團街頭布教多數團員の外吉永、京藤、藤山の諸師參加。

○十二日　堂園寺にて

信仰生活の妙趣　京藤師

轉同せる時相を觀て　吉永師

○二十二日　道頓堀にて青年團街頭宣傳清原淺野、德永、阪上、藤山等の多數團員及京藤吉永兩師熱辯を振はれたり。

○三十日　堂園寺にて夏期學生布教團講演

現代機構と佛教　木村　智弘君

現代生活と日蓮主義　林　信紀君

日蓮主義の特色　米倉　義信君

宗教とパン　高吉　純明君

信心の六大要義　笠原　信良師

多數の聽衆堂の内外に溢れ何れも盛會多大の効果を奏せり。立正青年團も創立已來日尚淺きにも拘はらず入團者續出前途光明に輝けり是れ全く聖應院日生上人の恩德と一回感激し合へり。

◎北陸教報

○七月二日　芳齊町にて家庭講話

現在を樂しみつゝ　能仁　一十師

○七月五六兩日　北陸線線道講話　能仁　一十師

○七月十八日　白井成器師金澤本覺寺へ御轉任に就き恩師三上上人來澤あり夜立正閣に於て反宗教批判講演會開催聽衆多大盛會なりき

○七月十九日　本覺寺入山式

講演　三上　義徹師

○七月二十日　本長寺盆踊鎮魂會　三上　義徹師

講演

○七月七日　天晴會　島田勇造宅　藤　啓純師

孝に貧富の差別なし

○七月十三日　要品講　小林豐三郎宅　藤　啓純師

造使還告

○七月二十日夜　錦琴紡績に於て　藤　啓純師

社會生活の宗教的淨化

○七月二十二日　小濱町本行寺に於て第十布教區開山會修行し法要の後ち　能仁　一十師

開會之辭　藤　啓純師

時然匡救と三寶興隆　見玉　日見師

○七月二十二日夜　新舞鶴法光寺にて
同會之辭　山主　桑村　常信師
報恩の道　藤　啓純師
孝の人日蓮と其感化　能仁　一十師
時節匡救と三寶興隆　兒玉　日見師
山主日頃熱心なる教化は聽衆によく現はれてゐた當夜集まる者百五十

○七月二十五日　信行寺虫拂會說教
道心の中に衣食あり　藤　啓純師

○七月二十七日　午前五時海拔三千米突白山頂上に於て　聽衆五十二名
立教開宗と此の心境　能仁　一十師
巳上

◎山陰教信

○七月四日　鳥取市法泉寺　高田　日暢師
法華經要義(二)
○七月八日　鳥取市法泉寺　高田　日暢師
妙宗大意
○七月十三日　鳥取地明會　高田　日暢師
御遺文講義
○七月十五日　市内二階町尾崎省三氏宅　高田　日暢師
無神有神の論論
○七月十六日　倉吉町立正會　高田　日暢師
立正運動
理想の宗教へ　安達　宏惠師
富田　日進師
妙法蓮華經とは何ぞや　高田　日暢師
○七月十七日　松崎本立寺　安達　宏惠師
立正運動
御遺忌を透して反宗教運動を見る　富田　日進師
反宗教運動と信教の根本義　高田　日暢師
○七月二十二日　鳥取運教關　高田　日暢師
無上甚深之大法
○七月二十七日　青谷町立正寺　高田　日暢師
信仰之基礎
○八月一日　鳥取市法泉寺　高田　日暢師
法華經要義(三)
(松本鐵治報)

誌料領收

自昭和六年七月二十一日
至仝　年八月二十日

一金貳圓四拾錢也　堺　村上篤三郎殿
一金參圓也　東京府　大谷權次郎殿
一金四圓也　東京　本田健一殿
一金壹圓也　仝　加藤重太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　仝　本多三郎殿
一金壹圓參拾錢也　仝　大村恂太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　奈良縣　出口馬太郎殿
一金壹圓五拾錢也
一金壹圓貳拾錢也　大阪　田端ミチ殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　西村正殿
一金貳圓貳拾錢也　兵庫縣　多木實殿
一金六圓也　札幌　本澤隆正殿
一金貳圓也　東京府　岩井庄三郎殿
一金壹圓拾錢也　仝　安井源吉殿
一金壹圓八拾錢也　仝　域忠克殿
一金壹圓貳拾錢也　仝　時見まん殿
一金五圓也　仝　石原系太郎殿
一金貳圓五拾錢也　東京　高田直三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　仝　米山平作殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　石井悦子殿
一金壹圓貳拾錢也　神奈川縣　西山喜太郎殿
一金貳貳拾壹錢也　東京　齊藤リイ殿
一金壹圓八拾參錢也　仝　三須久三郎殿
一金壹圓貳拾錢也　東京府　田中米吉殿
一金拾圓也　仝　野澤一郎殿
一金六圓也　仝　土屋喜久殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　搭長金太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　仝　搭長幸藏殿
一金貳圓貳拾錢也　仝　越引弘殿
一金貳圓貳拾錢也　仝　厚木彌三郎殿
一金壹圓貳拾錢也　仝　三宅たけ殿
一金參圓也　仝　安江ひさ殿
一金壹圓也　仝　岡野あきの殿
一金壹圓也　仝　鳥本あさ殿
一金參圓也　仝　土屋貞太郎殿
一金參圓也　千葉縣　川村善助殿
一金參圓也　佐世保　石崎榮宏殿
一金參圓也　神奈川縣　岩瀬せん殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　岩井藤吉殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　金指亀吉殿
一金貳圓貳拾錢也　仝　藤波芳松殿
一金貳圓五拾錢也　仝　福原脩殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　亀松壽雄殿
一金貳圓四拾錢也　仝　元橋義敦殿
一金貳圓四拾錢也　仝　中溝武三郎殿
一金貳圓五拾錢也　仝　中村海市殿
一金四圓四拾錢也　東京　中村のぶ子殿
一金貳圓四拾錢也　京都府　桑村常信殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　有住イヲ殿
一金參圓貳拾錢也　岡山縣　平松林三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　濱中茂富殿
一金六圓也　大阪　堂園寺殿
一金貳圓也　山形縣　遠藤貞次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　茨城縣　下條惠敦殿
一金貳圓五拾錢也　東京　須藤仙吉殿
一金四圓四拾錢也　仝　片岡東京店殿
一金貳圓四拾錢也　千葉　富田こと殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　小川吉助殿
一金壹圓也　横濱　松井健殿
一金參圓也　川崎　川崎敬會殿
一金貳圓也　青森縣　鈴木源八殿
一金貳圓也　高岡市　島山友次郎殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　菊地峰三殿

右難有入帳仕候也

「統一」會計

顯本法華宗内各寺院ニ念告

昭和六年八月二十六日附ヲ以テ顯本法華宗宗務廳ヨリ『宗内寺院ヘ無代發送ノ統一誌ハ一時中止相成度候』トノ通告狀ニ接シタルヲ以テ今後ハ特ニ講讀御申込無キ限リ例月配本差控ヘ申候間御諒承相成度此段念告仕候也

追テ本月號ニ限リ特ニ御贈呈申上候

昭和六年九月一日

統一誌發行所

振替東京五一〇七一番

目次

統一閣設立の趣意
修養と信念(下)……聖應院日生上人
意譯法滅盡經……小笠原長生
日生上人を憶ふ(其三)
統一團の主義(其一)……故本多日生
記事
○勅額拜戴と統一運動
○聖祖御遠忌大講演會
○野口日主上人葬儀記
○統一誌と統一團及總會
○統一團法人組織と寄附者芳名
○誌料領收

第三十六年十月號

絶好の機會！

大僧正故本多猊下最近の名著四種左の通り特價提供す吉凶共に此等の贈答は自他の法益極めて甚大ならん部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

一 法華經要義　定價 金參圓　送料 十四錢
一 日蓮主義心髓　定價 金壹圓八拾錢　送料 十錢
一 日蓮主義精要　定價 金參圓五拾錢　送料 十六錢
一 日蓮主義本領　定價 金貳圓五拾錢　送料 十二錢

今月中に限り一部賣は二割引
十部以上十九部迄二割五分引
二十部以上四十九部迄三割引
五十部以上九十九部迄三割五分引
百部以上は特に破格割引　送料は實費を申受く

申込所　東京市外南品川町妙國寺內
「教」發行所
振替東京一〇九五〇番

統一定價		
一ヶ年	半ヶ年	一部
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳拾錢
送料共	送料共	送料五厘
金之事	金前	

統一廣告料	
四分一頁	表紙一頁
半頁	一頁
金五圓	金貳拾五圓
金九圓	金拾圓
之事	前

昭和六年八月廿四日印刷納本
昭和六年九月一日發行（第四百三十八號）

神奈川縣横濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ